

など検討し修正していくこととなった。

3. 藤原賞の規定変更について

第24期理事会からの引継事項である授賞者数を「1名」から「原則として1名」にすることが了承された。また、同時に堀内基金奨励賞も「1名」から「原則として1名」にすることになり、来年春の総会に提案することになった。

4. 堀内基金奨励賞候補者推薦委員会の委員について 次の通り承認された。

| | | |
|------|-------|------|
| 担当理事 | 廣田 勇 | 京都大学 |
| 委員 | 駒林 誠 | 気象庁 |
| | 田中 正之 | 東北大学 |
| | 深尾昌一郎 | 京都大学 |
| | 松野 太郎 | 東京大学 |
| | 山形 俊男 | 九州大学 |

5. AGU (アメリカ地球物理学連合会) 日本開催の協力について

国内関連学会の相互連絡のための学会代表者連絡会議(12月6日)に、総合計画担当の松野理事が出

席し当面の対応をすることになった。

6. 第4回国際シンポジウム「都市気候・計画・建築」の主催団体として参加することについて、承認された。(昭和64年11月6~11日, 東京) なお、開催のための組織委員会構成には当学会から河村理事が参加する予定。

7. 極域委員会設立の提案について

研究会「南極圏の気象」の幹事の安成哲三会員(オブザーバーとして参加)から上記委員会を設立したいとの提案があり、審議の結果、このような専門分科会の積極的な活動を支援して行くことになった。

但し、学会の組織の中で位置づけについて今後常任理事会で検討することになった。

8. 研究会(講演会)のあり方について

講演企画担当の木田理事から、事情説明があった。この問題は今後委員会で検討することになった。

編集後記: 1988年も残り少なくなってきました。今年のは冬が早く訪れましたが、12月号がお手許に届く頃には本格的な冬になっていることでしょう。

1年を振り返ってみると、今年は気象現象が社会にいかにか大きな影響を持つかを、改めて身近に感じさせる年になりました。今年春から初夏にかけての米国中西部の干ばつが、穀物相場を暴騰させましたし、7月~9月にかけての東日本太平洋側での低温、日照不足、多雨により農作物が大きな打撃を受け、ごく身近には八百屋の野菜の信じられないような高値を呼びました。

このような気象現象については、エル・ニーニョの逆の状態である「ラ・ニーニャ」の影響とか、地球大気の温暖化の現われとか、いろいろ推測されているようですが、少なくとも対流圏の大気が、上層の大気、海洋、人間の社会活動など、様々の要素に左右されやすいものだというを(まだ、その実体は必ずしも明らかではないにしろ)再認識させることにもなったと思います。現在、上層大気とか、海洋を組みこんだ大気大循環モデルがこういった現象の解明のために用いられています。しかし、フロンガスがオゾンを破壊している可能性がある

などと言われると、そのうち『世界経済の動向』を組みこんだ大循環モデルなどというものも必要になるのかもかもしれません。

今月号は、いかにも冬にふさわしい論文二題の他、はからずも、海洋と大気との相互作用に関連した論文とWCPの窓が各1、中層大気とオゾンに関するワークショップ報告とシンポジウム報告が各1という構成になり、素顔'88まで掉尾を飾って『中層大気の女神』を登場させたのも、新しい年の大気研究の一つの流れを暗示しているような気がします。

なお、『天気』の誌面を充実させるために、アンケートを実施しています。今年の『天気』を振り返って、あるいはこれまでに感じてきたことなど、この機会に記入して投函して下さい。葉書は10月号の末尾に綴じ込んであります。

また会員の広場には誌上討論の提案を掲げています。読んで面白い『天気』をつくってゆくためにも、他の欄についても、皆様の積極的な参加をお待ちしています。

新しい年の大気研究の一層の発展を祈ってペンを置きます。(K)